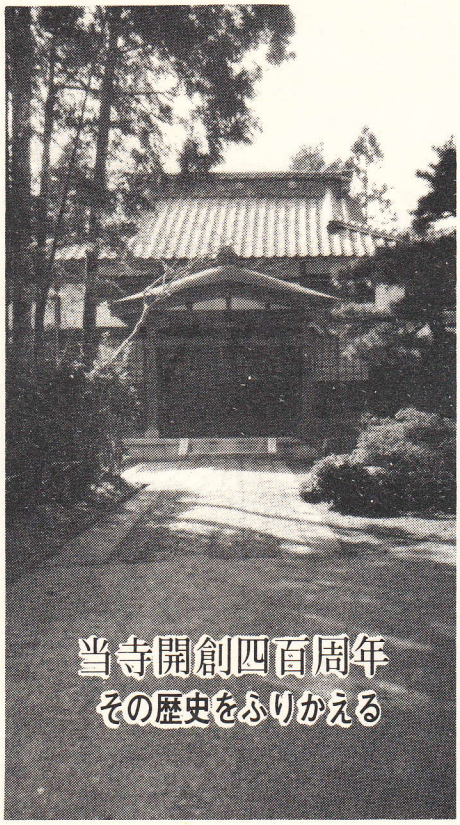
廣福寺だより

2号

昭和五十八年は当寺が天正十二年（一五八四）麓村浦之原に堂宇を建立してから四百年目に相当し、親鸞聖人七百回御遠忌法要に併せて「**当寺開創四百周年記念法要**」を厳修いたします。そのお待ち受けとして、本紙2号では当寺開創の縁起をたずね、往時の歴史をふりかえる記事を特集してみました。

安達左衛門尉兼道、親鸞聖人御染筆の尊像を授けらる

親鸞聖人が常陸国笠間の郡稲田の郷で一向専修の法義を弘めておられた時、聴聞する道俗男女の中に安達左衛門尉兼道という浪人があった。兼道はもと都の人であったが、故あって筑波山麓に住み宿縁浅からず聖人の化導にあい、他力の法義をよろこび、聖人に帰依して常随給仕するところとなった。その後貞永元年（一二三二）八月、聖人が京都にお帰りになる際、「今をかぎり何れの時にか逢ひ奉るべき」と兼道は聖人のお衣の袖にすがって深く別れを悲しみ涙にむせんだ。聖人時に感涙のあまり即座にお筆をとらせられ阿弥陀如来の尊像を染筆して兼道に授けられた。＜この方便法身尊像は今に当寺の寺宝として伝えられている。2ページの写真＞聖人は兼道に「かたじけなくも我らが身代りに無上殊勝の願を建立し救わずばおくまじと誓ひ給ひ、正覚すでに成就して阿弥陀仏となり給へる尊像を授くるによって、このの ち親鸞恋しくばこの尊像をねんごろに給仕し奉るべし」と仰せられた。そこで兼道は終生この尊像を安置して恭敬尊重した。



道西、尊像に蓮如上人御裏書を受く

兼道の子安達左兵衛は商人となり羽州庄内塩越村に居住していたが、左兵衛の一子が出家して道西と号した。道西は父祖伝来の尊像を奉じて真宗の法義を弘通していた。康正元年（一四五五）本願寺蓮如上人が宗祖聖人の旧跡巡拝のため羽州に御下向になり三月二十四日この尊像を拝覧され、渇仰のあまりみずからお筆を下しお裏書を与え、支証のため御印を下し給うた。その後上人は御経回を終わり文明三年（一四七一）越前の吉崎に隠居し給うたが、道西は上人を慕って吉崎へ参り数日御教化を受け帰国の途次、加州石川郡松野木村明専寺にしばらく逗留していたが、その地の領主は織田信長の幕下だったので道西は退けられ、明専寺も兵火に焼き払われたためこの尊像を負い奉り戦禍を避け信州戸隠の辺にしばらく居住していた。ところがなおまた信越の乱おこり、ひそかにのがれて下越後岩船に居住するところとなった。当寺の開基延定房祐善は能登国、柏原の人であったが天正

年間戦禍を避けて越後に移住し法義弘通のためこかしこ経回していたが、奇しくも道西に師事しともに教化につとめた。

当寺開基祐善、尊像を授けらる

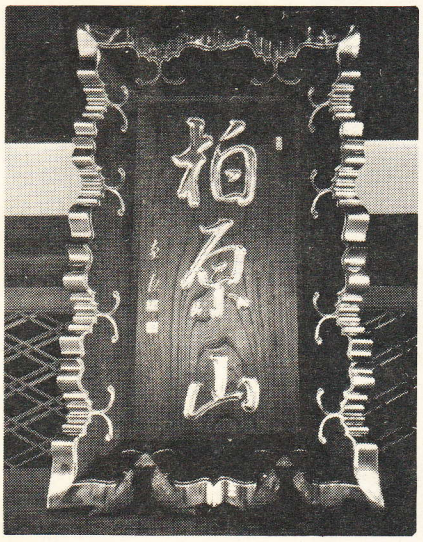
道西老境におよび死期も近づいたので、朝夕給仕していた弟子の祐善に父祖伝来の尊像を授けるところとなった。祐善は宿縁をよろこび尊像を恭敬し法義弘通にはげんだ。その後しばしば弥彦の麓を往返しているうちに聞く者これに帰依し、拝する者信を生じた。そこでこの地の同行は祐善をこの地にとどめることになり天正十二年当寺を建立しこの尊像を奉安した。以来退転なく今に伝来するところとなった。〈当寺蔵本尊縁起に拠る〉

祐善、能登から海路間瀬浜に上陸

開基延定房祐善は能登国柏原の人で天正のころその地に戦乱があり矢弾の中をのがれようとすると一弾は袈裟をかすめて落ち、次の弾は法衣の袖を貫こうとすると袖がうず巻いて弾を包み辛くも難を避けることができたという。戦禍をのがれて海路越後国蒲原郡間瀬村の浜に上陸した時祐善に供奉して同じ船で越後に移住した信徒があった。

祐善に供奉して移住した信徒

▽武石金五郎　弥彦村　麓　▽森田源五兵衛　観音寺、後に弥彦　▽渡辺定四郎　曽根後に函館、能登屋と号す　▽田中伊之助　升潟村大関、後に曽根　▽山本作兵衛　升潟　▽加藤善九郎　和納村本町　後に津右衛門と称す　▽棚橋弥次兵衛　浜首、後に東京　以上の七人と伝えるが、このほか次の三人が供奉したという十人説がある。



▽星野作右衛門　花見　▽小森曽右衛門　升潟村浦村、後に新潟、庄八と称す　▽加賀谷卯之七　寺泊町磯町、能登屋と号す。

能登国柏原と当寺の山号

当寺は古くから柏原山を山号とし、寺族は柏原（かしわばら）を姓とする。開基祐善の在所をかたどったものであろうと伝える。当寺の古記録としては第十世恵因の集録一巻があったが昭和十五年の大火に焼失した。以上は現住職が古記録や口伝の記憶をたどって集録した「見聞拾遺集」（昭和33）に拠る。

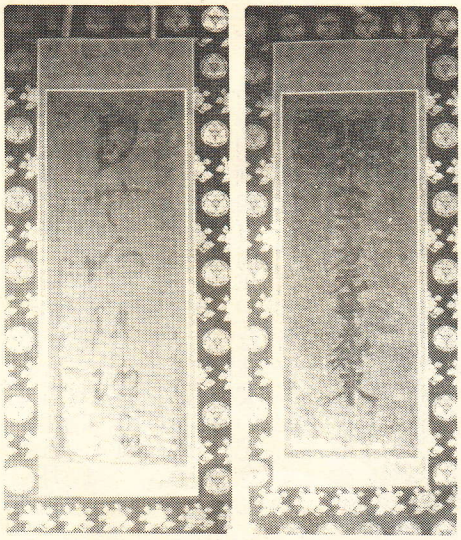
昭和四十八年弥彦村誌を読まれた和嶋俊二氏（石川県珠洲市在住、地名研究家）から当寺へ照会の手紙があり、能登の柏原は珠洲市宝立町柏原（かしはら）であることを御教示いただいた。地名の由来は地内の式内社、加志波良比古神社からこの名をとったといわれ、加志原・橿原とも書く。〈角川、日本地名大事典〉

なお中世には加賀を中心に能登、越前、越中に一向一揆の蜂起があり、開基祐善が能登の戦禍をのがれて海路越後をめざしたのは、大胆な推断が許されるとすれば上杉謙信が天正五年（一五七七）九月七尾城を占領して能登を領国のなかに併呑した時でないかと考えられる。いずれにしても、裏づける資料に乏しく後日の研究にまたなければならない。

広福寺小史・こぼれ話

転派のこと　当寺は開基以来真宗大谷派末寺であったが、貞享三年（一六八六、当寺第四世祐西の時代）信仰上のことで信州、越後の約百カ寺とともに仏光寺派に転派し、その後も当時の歴史を保って今日に至っている。当時まで御本尊は絵像を安置していたが、元禄二年（一六八九）六月十四日、仏光寺第二十代随如上人の木仏尊像の御裏書を頂き、お木像を御本尊として奉安することになった。

七世祐照　七代目住職の時代に正意安心に帰し、安心を改めた日が六日であったのでこの住職を「六日老僧」と称した。この時以来正しい法義相続のため和語宝典を読んで質疑応答する聞法活動が寺の庫裡で、また老門徒が頭となって在家の宅で展開されることになった。これを後に「**お寄り**」と名づける。

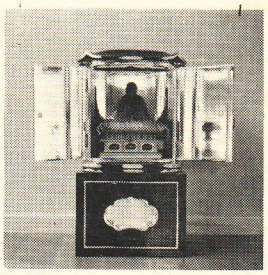


写真は当寺寺宝、右から親鸞聖人御筆の十字名号と、蓮如聖人御筆の六字名号

八世理教　若くして上洛、宗余乗を学び自坊に帰り父をして正意に帰せしめた。中島大蓮寺実相とともに寺泊聖徳寺円雅に師事、寝食を忘れて法義を研さんし、ついに疲労のあまり床に臥した。当時聖徳寺にいた志ん女は後の心光寺坊守で看護に当たり、まのあたり見聞したところを感激して人に語ったとか。かくて教化は実を結び寺泊、中島、麓、船越河間とお寄りが結ばれることになった。

十世恵因　文筆に長じ書を能くし当寺の重要古記録の編集、過去帳の作成等歴世中でも功労者といえる。第十一世恵空が本山褒賞を受けた答礼に上洛中病没、門徒総代竹之内松右衛門が上洛、東山本廟に広福寺墓を建て遺骨を納めて帰った。

十一世恵空　本山で堂衆を務めていた折に九州長崎に飢饉があり、弘教使おそれて差向を命じられても辞退する者が続出した。時に恵空苦難に身を挺し特命をもって御書を奉じて下向し、困窮の門末はその化導を大いに喜んだ。本山房官小幡大和介を補佐して本山の経済的苦況脱出にも功があり勤続十年、本山からの褒賞数度に及び随如上人御自作の親鸞聖人御真影、小厨子入りお木像を拝受し自坊に帰り教区年行司（教区長）を務めた。剛腹果断、奇智に富み、その言行は一見専横に見えても理にそむかず、幼時恵明と称したので村民は「蜂でハンミョウ、坊主でエミョウ」とおそれたという。晩年は悠々自適、猿を愛して座辺におき命じて煙管を掃除させたとか。布教に妙を得、平素訥弁でも一度高座に上れば妙弁流れるが如く凛として一場を圧し別人の観があった。



十二世恵海　本町広海寺慧満の男で養子として法灯をついだ。布教に心血を注ぎ特に宗祖の御伝文の研さん久しく、日夜筆録につとめ報恩講二十九日の講話には声涙ともに下り満座を感泣させた。囲碁に長じまた凧を好み本多清兵衛（清倫）老人に大凧の絵を描かせ浦之原でうちあげて興じたという。

十三世法道　十四歳にして出雲崎万因寺円順に入門、のち中島大蓮寺法梁に師事して宗学を研さんした。本山夏安居懸席十数回に及び会読の鬼と称せられた。性剛直、行儀厳正世事にかかわるところがなかった。大正十二年東京別院輪番に赴任して三日目関東大震災で堂宇が全焼し数年にして再建、勤続十五年自坊に帰り助講師を授けられた。生来茶をたしなみ晩年は書を楽しんで余生を送った。

柏原山広福寺之景　明治三十五年五月名古屋光彰館製版の銅版が残されていましたので新潟の旭光社で拡大して印刷、昭和十五年の大火で焼失以前の当寺の堂宇境内のおもかげをしのぶよすがといたしたく当寺開創四百周年記念法要の記念品として、このほど門信徒各位に配布することになりました。

第五世坊守妙智　お釈迦様の涅槃像の寄進を発起し奉仕の尼二人随喜して補佐しついに巾七尺、丈二間の大幅涅槃像寄進の大業をなしとげ以来涅槃会にこれを奉掲してきたが惜しくも昭和十五年の大火に焼失した。

第九世坊守妙往　寺泊聖徳寺から輿入れのくに女、武芸にたけ柔道、殊に長刀の達人であった。大力で朝は米俵を片手に持って掃除し夜は長刀を携えて境内を巡回し警備に当たったという。ある時茶の間へ長蛇が侵入、住職驚いて「曲ものなり、速やかに出合へ」と呼ばわると、坊守待ちもうけたりとばかりに馳せ参じ苦もなく蛇を長刀にくるくる巻きつけて庭外に放ったという。黒塗り金蒔絵の長刀、槍が保存されていたが昭和の大火に焼失した。輿入れの時持参の欅材造りの小箪笥は今も残されている。歴世坊守中の女傑。

梵鐘供養　正徳三年（一七一四）第五世祐円の時代に梵鐘が供養された。この時下通り（鱸・曽根・升潟）檀中の寄進で杉角材の鐘楼が建立された。その後明治三十四年第十三世法道の時代に再鋳、昭和十七年戦時金属類特別回収のため供出、昭和四十一年篤志者本間孝殿の懇志上納もあり高岡市で新鋳供養し今日に至っている。戦前は午前十一時に時の鐘をついて村民に親しまれ、報恩のため昭和三年三月、高嶋三郎右衛門殿が発起人となり**梵鐘講**が結成され、今にうけつがれている。

女性講　本山第二十四世随念上人御裏方念心尼公は女性講を結成され越後教区末寺を御巡教になり天保十四年（第十一世恵空の代）御書が下付された。それ以後門徒宅で講を結び法座を開き、今にうけつがれている。

お講　なお江戸中期以降（元禄、寛保、明和、天明）惣講中、亭主お講、女房講、若衆お講が麓村内をいくつかの組にわけ、村外の世間は集落ごとに八日講を結成し今日に至っている。この日は鐘をつき太鼓を打って開講を知らせ米、野菜、マキなど持ち寄り勤行、御書拝読、説教がありおときを頂き信仰を固めてきた。〈文中敬称略、お許し下さい。〉

昭和十五年の大火と復興　五月三日当寺から出火、心光寺はじめ二十九戸を類焼する大火で堂宇を全焼する未曽有の災禍に見舞われたが、衆恩をうけ大河津村町軽井中村家の家屋を購入して仮堂を造営し十一月一日御遷仏を迎えた。昭和二十七年新本堂再建が発議され、広く有縁の人々の浄財により昭和二十八七月十三日上棟式（棟梁隼野孝之殿、副棟梁武石祥輔殿）、十一月一日御入仏慶讃法要を勤修し満堂の参集者一同感泣のうちに新本堂の落成を随喜した。以来約三十年門信徒各位の御懇念に支えられ、本堂瓦葺工事をはじめ着々と堂宇の整備が続けられ、本年ここに御遠忌の盛儀を迎えるに至ったことはまことに御同慶にたえません。

発行所　広福寺　〒959-103　新潟県西蒲原郡弥彦村大字麓6590　電話0256-94-2437　印刷　ワノウ印刷